

令和4年度 国際理解教育講演会

12月20日（火）10:30～12:00 「私たちの難民問題」

講師：中尾 秀一さん アジア福祉教育財団難民事業本部関西支部・支部長代行

1・2年生の生徒が、難民の定義、難民の置かれている状況、受け入れの現状などを教えていただき、それらをどのように捉えるべきかについて考えました。



【生徒の感想（抜粋）】

- 1951年に難民条約が締結された目的は、途上国の支援を行うというだけでなく、冷戦の最中での西側の先進国の思惑が含まれているということを初めて知りました。ディスカッションで「もし難民として国外に避難するとしたら何を持っていくか」という話題について考えたときに、わたしたちは食料や水、毛布、スマートフォン、お金…など持っていく必要のあるものが次々に思い浮かんだけれども、実際に難民として国外に逃げている方の荷物は非常にコンパクトでした。いざ過酷な環境で長い期間をかけて国を脱出するとなれば、わたしたちが当たり前のように携帯しているものでさえも持ち運ぶことすらできなくなるのだとわかりました。
- インドシナ難民の様子等を写した写真を見て、実際の難民の様子が想像と乖離していたことに衝撃を受けた。難民キャンプのようなところから、国連などの支援で安全に移動するものだと思っていたので、本当に命がけで渡ってきていたこと、またそれなのに定住を認められていない不安定な生活だったことに驚いた。
- 特に、日本でインドシナ難民の変遷についてよく知ることができました。今現在の日本から考えると、難民キャンプが日本に存在していたことなど容易に想像できないので、ベトナム戦争後の1970年代に日本各地に多くの難民キャンプが存在していたという事実には驚きました。
- そもそも難民とはどのような人をさすのか、また日本の難民の受け入れの実態をはじめて知りました。日本は制度上難民の審査にとっても時間がかかり、また受け入れの実態からも難民から期待されていないことがわかりました。
- 果たして難民の受け入れが絶対正義なのか疑問に思った。高度に政治的な問題をその場の感情だけで論理を交えず考えるのは如何なものかと思う
- 今日の講義は初めて知ることばかりでしたが、その中でも特に新たに知り驚いたことは、難民の受け入れ国は発展途上国がほとんどだということだ。わたしはてっきりヨーロッパ諸国やアメリカなどの先進国が難民の大半を受け入れていると思い込んでいた。しかし実際は難民は遠くまで逃げることは困難で隣国に逃げているようだ。受け入れ国も貧しい国なのであれば、受け入れ国の支援も必要になってしまい、ますます世界の国々の間で負担が偏ってしまうのではないかと問題意識を持った。
- 難民の人が逃げる時に案内人に置き去りにされる詐欺のような危険があることは知らなかった。また、1時間で1800人もの人が故郷を離れて行っているというのも、多いというのは知っていたがこんなに具体的な数字をみたのは初めてだったので、驚きました。
- 難民の定義が曖昧であり、私の思っていた難民というものはニュースで報道された一部分だったということ。難民の大半を受け入れているのは、欧州の国ではなくて、近隣の国が多いということ。

- 難民の受け入れは日本が少ないという実感はあったがアメリカやイギリスなど、先進国が多いイメージだったが、トルコなど難民が発生してる国の近隣国が、たくさんの人数を受け入れていて、難民のうち 8 割以上が途上国に避難していると聞いておどろいた。また、難民というのは日本などの平和な国には関係のない事だと感じている人が多いと思うが、沖縄戦争の頃は日本だって同じようなことがあったから、他人事だと思ってはいけなと感じた。
- 難民の人たちの住むところがない、就職先が見つからないといった問題は難民の人たちの努力ではどうしようもできないことであり、それは私たちのこれからの課題であるということ。
- 難民の人は他国に行くまでに一番危険があるということだと思います。難民を受け入れてからその国がさまざまな支援を行うけれどそれまでの支援も必要なのではないかなと思いました。
- 難民の方は過酷な環境の中、国外へ脱出しているというイメージは何となく持っていましたが、冬にボートで地中海を縦断したり、砂漠を越えたり、もしかしたら脱出に成功するかもしれないけれど、見つかったら捕らえられたり、殺されたり、失敗したら命を落としてしまうかもしれないという常に命の危険と隣り合わせの状態で、それでも脱出しようとしているのだと改めて実感しました。もし脱出に失敗して命を落としてしまうとしても、自分の家に住み続けるよりは安全だと考えるような環境に自分が置かれるということは、想像しようとしてもできませんでした。しかし、太平洋戦争の沖縄での地上戦など、わたしたちの先祖の時代には日本でも同様なことが起きていたのだと知って、衝撃を受けました。現代の日本に住むわたしたちには想像を絶するような状況でも、ウクライナ侵攻がそうであったように、いつ何時わたしたちがそのような状況に陥るかは、まったくわからないのだな、と感じました。難民問題は、本当に他人ごとではないのだと思います。
- 日本への難民申請者数が多いこともなく、それを受けて日本が難民認定しているのはわずかだということを含までわかっていなかった。日本人は親切だという固定観念から、難民の受け入れに対して寛容だと思っている人が多いように感じたが、全くの逆で、G7 では圧倒的に受け入れ者数が少ないこと。一番は、紛争の理由としては、難民条約では難民として認められないことが世間で知られていないと思いました。
- 人権が保証されておる国では国籍を持っていると保護を受けることが出来る反面、人権が保証されていない国では迫害に受ける可能性がある。
- 国籍に関しては私たち日本人は当たり前を持っているためその大切さに気づいていないが、本当にかげがえのないものであると感じた。また、国境は難民の人たちにとってはとても大きな壁であるとわかった。
- 「国籍を持たない」難民の人々がどのような意味を持つのか分かっていなかった。国籍がなければ合法的に他国に移入できなかつたり、医療や教育などさまざまな保護を受ける権利すら得られなかつたりしてしまう。また国籍を持たない人への差別や偏見もあり難民の人々の精神的にも負担がかかってしまう。無国籍の人を減らすために何ができるのか調べてみたいと思った。
- 国境や国籍というのは、一人一人が背負うにはとても重いものであるが、難民の人たちはそれらの重荷を超えて渡ってきている以上、政府は国際的なスタンダードに近づき彼らのために活動していく必要があると感じた。また、高校生も難民に対する学習支援に携わることができる、という話があったが、難民問題を国が解決すべき課題として据えるのではなく、一人一人が取り組める課題として認識する必要があると感じた。また、長田区には移民が多く、神戸市が受け入れているウクライナ避難民の大部分も長田区が占めると聞いたことがある。難民問題は地元が抱える問題でもあるため、より主体的に考えていく必要があると思った。
- 国籍が違うだけで母国で技術を持っていたとしても受け入れ先では通用しないのが悲しいと思った
- 国境は、価値観を共有する先進国の間では厳重に警備する必要のないものかもしれないが、その他の場合では国家を守るためにはやはり必要だと思う。また、国籍については、祖国を離れた時でも、自らの祖国を示すものとしての役割を果たしうと思う。将来的には国境や国籍はあつてないようなものになるかもしれないが、現在人類にはまだそれは早いと思う。
- 国境や国籍があることで、秩序が保たれている。一つの国家としての連帯感が高まる。生まれた場所

が違うだけでこんなにも人に差があるのは惨いと思った。

- 全世界約 80 億人を 1 つの機関でまとめるのは不可能で、ある程度の人数に分けて政治、経済を行わなければならないので、国籍や国境は必要だと思う。グループわけのような意味があるのではないか。
- 国境があることで国と国が区別され、国籍があることでその国に生きている人という誇りが持てる。これは母国に感謝し人々の連帯を示すのにとっても大切なものだ。しかし、難民や避難民においては悪い意味で国ごとに区別され、また母国のことを嫌いになったり離れたりすることで国境、国籍のもつ意味はデメリットの方が大きいかもしれない。世界政府を求める人はそういう理由もあるだろう。しかし、国籍は自分のアイデンティティーを示すものでもある。大切なのは難民を国や地域で分けるのではなく、国境なき医師団などのように世界全体として難民を救うことだと考える。国籍や国境というのは母国を愛し連帯を示すものだと考える。
- 日本は島国なので国境がはっきりしており、長い歴史のなかでの外国や異文化との関わりが他の国に比べてかなり少ないと思います。だから難民の受け入れも慎重に行っているのかなと思いました。また、日本語が独自すぎる言語であることも大きいと思います。たしかに中国語から派生した言語ではあるけど、世界でも難しい言語と言われている言語なので、難民の方々にとっても難民先として選ばずとも思わないのではないかと思います。それにしても、日本には難民を受け入れようという気持ちが弱いと思います。正直、日本人一人ひとり、国籍が違うからといって差別するようなことはしないと思います。しかし、社会的には国籍による差別が残っているのが現実なのかなと思いました。悲しい限りです。やはり、言語の壁はあるとしても、それ以外のところで受け入れる努力をすることが大切だと思います。
- 私たちは「日本」という国に生まれたために実感しにくいけど、どの国に生まれるかで、どれほど人生が変わってしまうのかを改めて考えさせられた。世界協調、グローバル化という言葉が謳われている現代、地球人すべてが自由に国籍をもつことができれば幸せなのではないかと感じたが、実際には難しい。均衡を保つためには今のように「国」という枠組みが不可欠であるのは明らかであり、無くすことは不可能だ。だからこそ、やはり先進国が率先して難民を受け入れることが必要であり、そのための資金や条例を明確にすべきなのではないか。
- 主観的な考えかもしれないけど、何事にも、困惑している人には上から目線で見がちだから、外国人に対してなんか区別（差別）していると思うのでそういったかんがえを一切なくせるようなとらえ方を皆ができたらいいなと思う。
- どれだけの人が国に入ってくるかななどを管理し、自由に移動する権利を制限しないと、国家が混乱してしまうため、国境は必要であると思う。難民を受け入れることで自国が無法地帯になってしまっただけでは本末転倒だと思う。
- 国境が引かれているから、国籍が違うから、という理由で自分には関係ないと手を差し伸べないのではなく、国際的に取り組むべき課題であると思う。また先進国として日本はやはり他の国々を引っ張っていくべき立場にあると思う。なので、もう少し難民認定の条件や難民申請の期間を短くしたりするなどして、難民の受け入れ体制を整えていくべきだと思った。
- 国境や国籍が無いと弾圧や戦争などで自身の生活が脅かされる人々が大量に溢れて逃げ込もうとする国が崩壊してしまう可能性もあると思った。そのため国境や国籍を設けることで本当に苦しい状況にある難民を安全に迅速に保護しやすいのかなと思った。まずは社会全体が難民についての理解を深め身の回りの生活にアンテナを張る必要があると思った。
- 社会はグローバル化しているといいつつも、異なる言語、文化を持つ人々が他国に馴染むことは決して簡単ではないと思います。また、難民として他国から来られた方を、その国の言語や文化に染めて、難民の方々が元々住んでいた国の言語や誇りを抹消することになるのも、関わり方として違うと思います。大事なことは、それぞれの国の国境や国籍をなくして、一つの国として統一していくという流れではなく、それぞれの民族が持つ国境や国籍を大事にする心と、異なる国家が共通言語などを用いて歩み寄り、コミュニケーションをとれるように調和しようとする心のバランスだと思います。わたしがこれから難民問題を考えるときには、そういった視点を忘れないようにしたいです。

- ただ生まれた環境が違うだけで、私たちのように裕福な暮らしをしている人もいれば、いつ殺されるかもわからない状況で苦しみながら生きている人もいるという現状はすごく不平等で、同じ人間として見過ごせない重要な問題だと思う。一つの命の価値は民族や人種、外見や身分が違ったとしても変わらないはずなのに、私たち先進国はたかが経済的な理由や自分たちの事情で難民を受け入れなかったり、十分に助けてあげなかったりするのすごく悲しい。この国では手に負えないから助けられない、とか、経済的に手間がかかるとか、自国を優先した考え方だと世界は一生不平等で、裕福な暮らしの裏でたくさんの命を踏み潰してしまっているように感じる。経済が回らなくなっても、裕福な国民から非難されても、弱い立場の人を助けるのが最優先のはずなのにそれができない現代の社会はほんとに最悪だと思う。難民の方々の立場を想像して、理解できなくても理解しようとする心や行動が必要だと思った。私はこの講演会で、難民の問題に興味を持っただけでなく、今の自分の視野の狭さに気づけた。講演会で新長田で難民を支援する施設があると聞いたので、今度行ってみたいと思う。まずは今日聞いたことを振り返ったり、自分で情報を集めて、今苦しんでいる人々の状況を正しく理解して、自分にできることを少しずつ行動におこしたい。また、大学でも国際的な問題や、難民支援についてより深く学んでみたいと思ったので、進路をもう一度じっくり考え直したい。
- 国境というのは歴史的に作られたいわばただの線であり、その線の内側には全く同じ人種の同じ宗教の同じ思想を持っている人かということそんなわけがないです。そして、その線の内側で紛争が起こり命が危うくなった時、その線を越えることがこんなにも困難だということはおかしいと感じました。考えてみれば国境や国籍というのは人間が勝手に作り出したただのシステムです。このシステムが作られた理由は本来人を守るためだと思います。それが現在、難民にとって反対に存命を妨げる壁となってしまっています。国々は、線の内側だけを考えるのではなく、同じ人間であり、命に関わる困難に直面している難民について思い、快く受け入れていくための方法を考えていくべきだと思います。